

切腹をめぐるって-アンドレ・マルローと三島由紀夫

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大貫, 明仁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7391

切腹をめぐって

——アンドレ・マルローと三島由紀夫——

大 貫 明 仁

はじめに

一九七〇年十一月二十五日、三島由紀夫（一九二五—一九七〇）は自衛隊市ヶ谷駐屯地で割腹自決した。

その三十九年前の一九三一年十月、当時まだフランスで若手作家だったアンドレ・マルロー（一九〇一—一九七六）は初めて日本を訪れた。神戸で行われた新聞記者会見の席上で、彼は突然、切腹について論じた。

私の考え方を、かんたん直截に云つてのければ、日本人のハラキリは——《死すること》であつて、決

して《死ぬこと》でない。繰返して云はう——死することであつて、死ぬことではない。云ひかへると、ハラキリにおいて、《死》は消滅する。死といふ人間の条件を、或る人間の意思が、自由に否定する行為であるからだ。ハラキリにおいては、より高き倫理価値が、自己にたいする超越のかたちによつて、死にたいする克服のかたちによつて肯定されてゐるからである。

フランス人に切腹の話などされると思つていなかった記者たちは啞然としたらしい。

マルローと三島はともに死の意識に憑かれた作家であつ

たといえるだろう。特に自殺、なかでも切腹が彼らの興味を引いた。マルローと三島の切腹についての考えを文化継承の観点から見てみる。

I

日本の伝統的自死の形式である「切腹」がどのように西欧に広く知られるようになったかは大橋寿美子「マルローの死の意識と日本的なもの」(『総合文化研究所紀要』第六卷一九八九・三)に詳しく述べられている。切腹がハラキリという語で西欧に広く知られるようになったのは、明治維新のまさにその年に、西欧人立会いの下に切腹が行われ、大きい衝撃を与えたことによるらしく、フランスでは、一八七三年出版の辞典ラルースに *harakiri* の語が現れているという。マルローの世代のフランス人が切腹を知っていることは当然であったろう。しかし、前章に見たマルローの切腹観は彼独自のものといっている。ここにはマルロー思想のキーワードが二つある。「人間的条件 *la condition humaine*」(一般には「人間の条件」と訳されるので以後はこの訳を使う)と「超越 *la transcendence*」である。いかにして人間

の条件つまりは人間の宿命を克服し、超越するかがマルローの生涯における、最大の関心であったといえることができるであろう。彼にとっては死という人間の条件を、人間の意思によって克服する行為、超越する行為が切腹なのである。

このような切腹観は晩年になっても変わらなかったようである。マルローは一九七二年五月三日の竹本忠雄との対話で、三島の自決について次のように述べている。

三島については、行為としての死は、じつに強烈な現実性を持っているといわざるをえません。そこには偉大な日本の伝統が息づき、儀式がものをいっている。……(中略)……日本的自死には、はかりしれない大問題が秘められています。いかなる文明も、死というものを儀式的行為たらしめたところはほかにないからです。ある流儀によってこれを課したのもこそ、日本の騎士道だった。日本の騎士道といっているのだから、日本といっているわけではありませんがね。しかし、なぜ、ある流儀によって、といるのか? ああ、それにしても死というもの、まったく存在しないような一個の文明に出遭ったとして

も、どうしても不自然なことがあるか——だれもが子供のころから自決の瞬間を選ぶべきであると知っているような文明に！

私には、三島の行為は死を掌握する一手段であったように思えるのです……

三島の切腹を「死を掌握する一手段」つまり、死を克服し、超越する行為として評価しているといえる。

しかし、気をつけなくてはならないのは「人間の条件」と「超越」という語がマルローによって作られたわけではないということである。彼の使用法に独自性があるとはいえず、これらの語は長い歴史を持っている。「人間の条件」という語の出典は十七世紀の思想家パスカルの『パンセ』である。

いくらかの人々が鎖につながれ、皆死刑を宣告されていて、そのうちの幾人かが、日々、ほかの人々の目の前でのを切られ、残された人々は同胞たちの状況のうちに自らの状況を見て取り、苦しみながら、希望なく、互いに顔を見合わせ、自分たちの順番を

待っている。そうした様を想像せよ。それが人間の条件 (La condition des hommes) のイメージである。⁽⁴⁾

マルローは尊敬する思想家パスカルからこの語を借り、それに独自性を加味したのである。

「超越」はさらに長い歴史を持っている。『岩波 哲学・思想事典』(岩波書店・一九九八)によると超越概念がはじめて体系的に考察されるのは、神・超越者が考察の主題となった中世であり、しかもアリストテレスの哲学が伝えられた十三世紀以降のことであるという。その後、現在に至るまで、「超越」は、意味を変容させつつも、西洋哲学の主要な主題であり続けている。

マルローが深く西洋文化に根ざした「人間の条件」や「超越」という概念で、日本文化である切腹を理解しようとしたことは確認しておくべきであろう。

II

マルローにとって切腹は「死という人間的条件を、ある人間の意思が、自由に否定する行為」であり、日本の

騎士道は「だれもが子供のころから自決の瞬間を選ぶべきである」と知っているような文明」であった。彼は三島の切腹を「死を掌握する一手段」と見ていた。

しかし、三島は『葉隠入門』においてマルローとは別の死と切腹についての考えを展開している。まず、三島は日本人にとっての死は西洋人が考える死とは違っていると述べている。

日本人は、死をいつも生活の裏側にひしひしと意識してゐた国民であつた。しかし日本人の死の観念は明るく直線的で、その点、外国人の考えるいまはしい、恐るべき死の姿とは違つてゐる。……(中略)……何かその死の果てに清い泉のやうなものが存在してゐて、その泉のやうなものから現世へ絶えずせせらぎがそそいでゐるやうな死のイメージは、長らく日本人の芸術を富ませてきた。

さらに次のように述べている。

人間は死を完全に選ぶこともできなければ、また死を完全に強ひられることもできない。

自由意思の極地のあらはれと見られる自殺にも、その死へいたる不可避性には、つひに自分で選んで選び得なかつた宿命の因子が働いてゐる。

三島にとっては、死は「何か雲間の青空のやうなふしぎな、すみやかな明るさを持つてゐる」ものであり、人間の意思がそれを自由に否定することなど不可能で、否定する必要もないということだろう。マルローのいう「自決の瞬間を選ぶ」ことも完全にはできないと述べている。三島にとって切腹は「死を掌握する一手段」でなかつたといえる。

しかし一方、三島の死や切腹についての思想が純粹に日本的なものだったといえるであろうか。そこには西洋文化の伝統が入り込んでいないか。三島は次のようにいう。

「葉隠」は、けつして死ぬことがかならず図にはづれないとは言つてゐないのである。ここに「葉隠」のニヒリズムがあり、また、そのニヒリズムから生まれたぎりぎりの理想主義がある。

しかし「葉隠」が示してゐるのは、もつと容赦ない死であり、花も実もないむだな犬死さへも、人間の死としての尊厳を持つてゐるといふことを主張してゐるのである。⁽¹⁰⁾

「ニヒリズム」、「尊厳」という概念は西洋が生んだものである。そのため、これらの概念を使って三島の説明する死と切腹は、本来の『葉隠』におけるものとは別な色彩を帯びるのである。三島に限らず、明治以後の日本人は西洋文化の継承者でもある。江戸時代以前の日本人が考えていた切腹と三島の切腹観は同じではないのである。

おわりに

マルローにせよ、三島にせよ、自分の視点が属している文化によって制限されていることを自覚していた。

マルローはすでに二十六歳の時に、『ヨーロッパの青春について』で次のように述べている。

キリスト教の偉大な贈物とは、まさしく西欧の「現

実」である。だからこそ、われわれの第一の弱さは、もはやキリスト者ではないはずのわれわれが、世界を知るためには、依然として、キリスト教の仕切り格子のお陰をこうむらねばならないことである。⁽¹¹⁾

現代においても、ヨーロッパ人は「キリスト教の仕切り格子」を通してしか何も見ることができないわけである。

フランス人でありながら日本の切腹という文化を理解しようとしたマルローは、二十世紀のフランス文化に属する者に可能なやり方で、それを理解し、継承したのである。

一方、日本人でありながら西洋文化の継承者でもあった三島は、二十世紀の日本人として、切腹という文化を継承したといえる。

同じ時代に遠く隔たった地に生を受けた彼らの切腹観を比較することで、こうして文化の継承と変容の過程が検証されるのである。

注

(1) 小松清『人間マルロー』、現代フランス作家叢書II

- 『アンドレ・マルロオ』所収、新樹社、一九四九、p. 200
- (2) 竹本忠雄『マルローとの対話——日本美の発見』人文書院、二〇〇〇、pp. 98-99
- (3) 同前、p. 111
- (4) フランシユヴィック版『パンセ』断章一九九
- (5) 三島由紀夫『葉隠入門』、『三島由紀夫全集』(第三十三卷)所収、新潮社、一九七七、p. 110
- (6) 同前、p. 111
- (7) 同前、p. 112
- (8) 同前、p. 111
- (9) 同前、p. 114
- (10) 同前、pp. 114-115
- (11) 堀田郷弘『アンドレ・マルロー小論』高文堂出版社、一九七九、p. 27